

## 地域SNSは「地域力」に貢献できるか ～北海道SNS「どっとねっと」の実験を踏まえて～

mixi（ミクシィ）に代表されるインターネットのコミュニケーションサイト「SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）」は、コミュニケーションを活発にするツールとしての役割を期待され、その結果「地域SNS」が各地に誕生しました。財北海道開発協会では、公益事業の一環として、平成18年秋から実験サイト「北海道SNSどっとねっと」を開設し、地域SNSが地域の「機能」と「力」を生み出すかを検証してきました。8月22日に財北海道開発協会の6階ホールで開催されたフォーラムでは、グローバル化の中にも北海道と地域を位置付けた上で、地域SNSの「地域力」への貢献について、「どっとねっと」の参加者を核にして、それぞれの体験に基づく熱い議論が行われました。

基調講演と、参加者の一人が「ジェダイ評議会」とネーミングした車座トークの一部を紹介します。

### 基調講演 1

#### グローバル化の中にも北海道と地域の活路



八幡 康貞 氏  
元上智大学教授  
小樽市生まれ。季刊誌  
Swiss-Japan Journal  
(SJCCチューリヒ発行)を  
インターネット経由で共同  
編集している。「どっとねっ  
と」のコアメンバー。

グローバル化とは、人間の本性そのものだ。人間の本性は「より良い生活」「より美味しいもの」「より楽しいこと」「新しいこと」を求め、人類は発展してきた。そういう意味ではグローバル化というのは、ホモ・サピエンスの時代から人類がやってきたと言える。近年、グローバル化が広く認知されるようになったのは、ベルリンの壁の崩壊

とソ連の崩壊によって、東西の分割で世界を安定させてきた歴史的な政治的枠組みが崩壊したことと、パソコンが広く普及してソフトやワークステーションが進歩したことがきっかけ。



1989年にティム・バーナーズ＝リーがhttpやwwwの通信の技術を開発・公開したことで、世界がインターネットでつながり、物理的、距離、時間の壁がなくなった。このグローバル化はまさに大革命で、世界が変わったと思わなくては行けない。ウォールストリート事件やリーマンブラザーズの問題からグローバル化に否定的な意見もあるが、これを元に戻すのではなく、見据えてうまく使って先に進むことを考えた方が建設的で生産的だ。そもそもウォールストリート事件やリーマンブラザーズの問題は経済事犯であり、グローバル化そのものではない。グローバル化は世界史の新しい段階で、地球を逆回転できないように、巻き戻しはできない。パソコン、インターネット、ジェット旅客機、大容量海底ケーブル、衛星通信などをなくしてしまうことはもはや考えられない。

その中で、北海道はグローバル化時代、すなわち、障害を取り除いて整地された世界規模の競技場での個人、地域、企業の自由競争の時代を勝ち抜いていける根本的な強みがある。地方分権というのは分国が本来の原理的な出発点。ヨーロッパで分権が進んでいるところは、かつて別の国だったところが生き抜くために共生して連邦を作ったところが多い。

日本でも、そういった分国意識が地方になれば、本当の地方の自立や活性化は不可能だ。北海道は面積がスイスの2倍あり、人口はスイスの3分の2、地理的な条件と、領土的なスペース、人を呼び集められるスペースなど、これから発展できるスイス人もうらやむような大きな要因を持っていて、本当は自立できるだけの力を持っている。

また、他の地域にはない歴史的な自由さがあり、余計なバラスト（底荷）を持っていないため、自分の未来像を過去と関係なく自由に思い描ける心理的な自由さを持っている。予め開けた心理的、精神的状況がある。北海道は、アルプス北側のヨーロッパと気候、作物や樹種、四季の変化など似ている点が多く、ヨーロッパ的な産物が自然にできるところなので、食生活、住生活も必然的に日本的でありながら、同時にヨーロッパの進んだ部分を共通項とした、新しい北海道的な展開というものを考えてみるができるのではないか。そういったことを考えていく上で、SNSは役立つ。かつて夢でなかった現実はないように、みんなで夢を語って夢（=将来の現実）の設計を進めるのに、SNSは最高のプラットフォームだ。

## 基調講演 2

### 「どっとねっと」の問題解決能力と生涯学習



**小松 正明 氏**  
元掛川市助役  
室蘭市生まれ。掛川市助役赴任中は生涯学習まちづくりやスローライフ運動を牽引。まちづくりブログ「北の心の開拓記」を運用中。「どっとねっと」のコアメンバー。

掛川市で生涯学習をキーワードにしたまちづくりに助役として3年間触れてきた。それ以来ブログを続けているが、これが日々の生活の中で役に立ったり、彩りを添えたり、悩みの種になっている。良いことも悪いこともある中で、答えがネットの中に見つかるのかという観点で話しをしてみたい。

掛川市では、1人ひとりが「自分は何だ」「何をなすべきか」と問いかけ合いながら学び続けること

によって、健康に気をつかい、死ぬまで社会のさまざまなことに関心を持ち続けることが生涯学習だとしている。世の中、知識、自分の故郷、環境など、自分が好奇心を持って勉強する関係性を作り上げることが、日々の生涯学習の実践活動そのものになる。そう

いった好奇心を自分の中に取り入れて役立てることに對して、どのようにインターネットを生涯学習に使えるのかということがある。現代社会は情報爆発の時代で、インターネットによっても、良いもの、悪いもの、嘘や本当も含めて、情報が爆発的に増え続ける時代に突入しているという認識を我々は持たなくてはいけない。

ブログやSNSなど、インターネットで誰もが簡単に自分から情報を発信する能力を身につけたことで、個人の能力は大幅に向上したが、情報を得るためにインターネットをうまく使える人とそうでない人の情報格差が大きくなり社会問題にもなりかけている。また、情報を整理する力も求められるなど、インターネットのリテラシーが大事になっている。リテラシーとは情報を正しく利用するための能力のこと。情報に対するニーズを認識して、それに自分がたどり着けるか、また手に入った情報に対しての真偽を考えられるか、情報を管理できるか、自分が情報の新しい価値を生み出すことができるか、そしてこうしたことを、文化的、倫理的、経済的、社会的にどういう問題があるかを認識しているか、こういったことを身につけなければインターネットの中でおぼれてしまう。

しかし良い部分としては、たくさんの方がインターネット社会に参加して、何がしかの一人一芸を持ち寄ることで、知恵や大きな情報の塊「集合知」になる可能性がある。インターネットは、そうした活動を極めて容易にしたツール。インターネットによる問題解決への道筋としては、インターネットへの参加の段階にもいくつかの方法があり、ただ情報を探す段階から、一步踏み込んで掲示板やブログ、SNSなどに参加し、さらにそこから討論や意見交換までできるようになると、リテラシーも向上して、問題解決の道筋につながる。インターネットによる問題解決のためには、多くの情報を求めるには多くの参加者を求めなくてはならないが、人数の大小にともなうコミュニケーションの深度によって信頼の度合いが変わってくる。

その中でより質の高い情報を取得するためには、自分自身のリテラシーの能力を高めることが必要。能力が不足して踏み込めない部分については、信頼のできる人やサイトなど、関係性で補うという方法もあるが、情報利用の最終的な責任は、常に自分自身にあるということ、覚悟しておかなくてはならない。インター

ネットは、大きく踏み込んで参加をすれば大きな成果が得られるが、少ししか参加しなければ小さな成果しか得られない。そういった自覚を持ちながら、インターネットの中で自分がいかに貢献し、参加し、メリットを得られるようになるかが、インターネットによる問題解決の一つの在り方ではないかと思う。

## 車座トーク

### 「どっとねっと」の実験サイトに参加して

**草苺** 地域SNS「どっとねっと」は、少子高齢化で人口が減っても地域が元気に生き残るためのコミュニ



コーディネーター  
**草苺 健** 氏  
財北海道開発協会開発調査総合研究所主任研究員  
山形市生まれ。ホームページ「雑木林&庭づくり研究室」主宰。現在、勇払原野の保全と利活用を担うNPO法人苫東環境コモンズの設立準備中。

ケーションツールとして、地域で役立つか、ということテーマにして開設した実験サイトだ。地域の人を結ぶつながりの装置として、ソーシャルキャピタルに役立つのではないかと、ということがこれまでの運営で見えてきた。しかし、これまで「地域SNSが本当に地域の役に立つのか」ということを正面から議論してきたことはなかった。今回のフォーラムは利用者の生の声を聞ける良い機会になる。日常的なアクティブライターとしてどのような印象を持っているか。日頃の付き合い方と一緒にうかがいたい。



**稲垣 順子** 氏  
どんこり堂主宰  
釧路市生まれ。サロベツ原野にある寺院に住み、自然体験やコンサート、子どもを対象とした日曜学校など、田舎ならではの暮らしを楽しんでいる。

**稲垣** 幌延町の小さな集落のお寺に住んでおり、コンサートや絵本展、子どもたちを集めての日曜学校といったお寺での活動を「どっとねっと」で紹介している。いくつかのSNSも登録していたが、現在利用しているのは「どっとねっと」が一番多い。住んでいるところがサロベツ原野なので、サロベツ原野の暮らしぶりを主婦の目線で日記にUPしている。

**大塚** シリコンバレーが始まったころにアメリカに留学した時からコンピューターを使い始め、パソコン通信もやっていた。インターネットは、留学した時の語学力を維持したいと思い、インターネットを通じて、アメリカのニュース番組を視聴したり、英字新聞を読んで、英語の勉強をするために使うことが多い。



**大塚 哲世** 氏  
塾経営  
旭川市生まれ。青年会議所やロータリークラブで地域活動を行い、現在は塾を経営。インターネットはパソコン通信の時代から20年程のベテラン。



**加藤 由紀子** 氏  
北海商科大学准教授  
札幌市生まれ。北海道で観光関連を学ぶ若い人達や中国、韓国などの留学生のキャリア形成教育を行っている。

**加藤** 地域SNSでの議論が地域活性化につながっているという事例はしばしば見られる。ただ、そのためには議論から実行に移すメンバーの存在が不可欠。地域SNSの中にそのようなメンバーが何人いるのかということが、地域SNSが地域に役立つかどうかという部分の大事なポイントになってくると思う。また、若い人のエネルギーだけでは解決しないこともあるの

で、中高年の良質なコミュニケーションの場から出てくる「知恵」を利用し、いかに地域を動かしていくのか、地域のアイデンティティに絡んでいくのかという部分も重要。

**白鳥** SNSはmixiに入ったのが最初。北海道から英国に移り住んで15年ほど経っていたので、「北海道の人と話しをしてみたい」と思い、mixiのコミュニティで「どっとねっと」の存在を知って参加した。今となっては「どっとねっと」は自分にとって日本と英国のインターフェイスになっている。ネットを介して臨場感が伝わるのはSNSならではの。



**白鳥 郁子** 氏  
翻訳家  
砂川市生まれ。1992年に語学留学のために渡英し、移住。現在はイギリス南西部にあるブリストルでソフトウェア会社に勤務している。



**三浦 保彦 氏**  
元公務員  
後志の共和町生まれ。川柳や囲碁などの趣味をインターネットを通じて、定年後の生活を楽んでいる。

**三浦** 定年退職後は生涯学習の「道民カレッジ」で、主に「ほっかいどう学」というのを勉強していて、「どっとねっと」にも話題提供としてUPしている。SNSは「どっとねっと」のほかに、シニアの「スローネット」に入っており、ほかには日本棋院ネットでインターネット碁を楽しんでいる。

**宮田** オホーツク地方のNPO法人でITと情報発信を行っている。私たちの団体でも地域SNSに興味があったので「どっとねっと」にも登録させてもらい、その経験を踏まえて「オホーツクコネクト」という地域SNSサイトを開設した。「どっとねっと」は、コミュニティや交流、信頼関係が密なの、他のSNSとは違う部分。



**宮田 博行 氏**  
NPO法人オホーツク21世紀を創る会  
美幌町生まれ。オホーツクのPR活動や地域でのイベントへの協力に携わっている。インターネットを使って、オホーツク地域の情報発信に取り組んでいる。

**村上** 私は道外出身者で道産子ではないが、北海道には24年ほど住んでいる。インターネットはカナダ出身の夫が、カナダに住んでいる友人との仕事やコミュニケーションのためのツールとして使い始めた。自営業を営んでいるが、そうすると人と出会うことが少ないため、社会とのつながりが薄くなって自分の精神的な均衡を保つのが難しくなるが、mixiでは規模が大きすぎる。「どっとねっと」は、同じ北海道に住んでいる人同士のヴァーチャルなソサエティという印象。



**村上 京子 氏**  
マッシャー  
東京都吉祥寺生まれ。大学卒業後、就職を機に北海道へ移住。建築士事務所を営み、冬にはマッシャー(犬ぞり体験)を地域で行っている。



**小林 好宏 氏**  
札幌市生まれ。北海道大学名誉教授。北海道開発協会会長・開発調査総合研究所長。

**小林** 八幡氏がテーマにしたグローバル化に伴う道州制などの一連の議論は、現実問題として、人口減少が進む北海道にとっては厳しい問題。地方圏というのは困難な状況を抱えているが、そういう状況の中でも、北海道に住み続けたいと思わせるにはどうすれば良いかということが大事。

**八幡** グローバリゼーションで出てくるのは、競争による格差。しかし、それは力だけの違いではなく、クオリティの違い。グローバル化の時代こそ、小さくてもクオリティの高いものを世界に知らせることが大事で、インターネットに乗せて流すこともできる。クオリティの競争なので、力の弱い者にもチャンスがある。その部分で、北海道がどう生き抜くかが大事。

**小松** 「物事」という言葉の「物」というのは実態で、「物」の関係性が動いているのが「事」。インターネットの世界では「事」を生み出すのに使われるが、それが付加価値を生むためには「物」に帰着させて、物が売れるという行為につながって初めて実態が伴う。北海道に関して、地域SNSなどで、「事」を起こす中で「物」の付加価値を生み出すということを真面目に考えなくてはいけない。地域で盛り上がっているということが発信されていくことで、実体につながっていく。最終的に「物」につながる「事」を起こすことに、地域SNSが地域に役立つための一つの意味がある。

**フロア** お話を聞いていて、このSNSで中高年中心のコミュニティができていると感じた。自分も他県で地域SNSの運営をしてきたので、参考になった。

**草苺** 「どっとねっと」を立ち上げた当初は、コミュニケーションを補完するだけではなく、地域の物産を情報発信するビジネス利用も視野に入れていた。小松氏は、発信して実体につなげるのもゴールだとしたが、改めて留意していきたい視点だ。

地域SNSは、これからの地域に役立つと八幡氏が明言された。また、現実には夢のひとかけらとおっしゃった。夢を語り設計するプラットフォームとして地域SNS「どっとねっと」の実験は続けられたら良い。

(文責：開発調査総合研究所 齊藤)

追記：フォーラムの詳細は後日、北海道開発協会のホームページに掲載する予定です。また、関心のある方は、新規に登録され、運営に参加されることをお勧めします。